



Title	「思う」と「 査の要旨」 (sayngkakhata) の日韓対照研究 : ヘッジとポライトネスの観点から [論文内容及び審
Author(s)	李, 鳳
Citation	北海道大学. 博士(国際広報メディア) 甲第11427号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/55674
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Bong_Lee_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名：李 鳳

審査委員	主査	教授	上	田	雅	信
	副査	特任教授	佐	藤	俊	一
	副査	教授	山	下	好	孝

学位論文題名

「思う」と「생각하다(sayngkakhata)」の日韓対照研究
—ヘッジとポライトネスの観点から—

本論文は、日本語の「思う」と、それに対応する韓国語の動詞「생각하다 (sayngkakhata)」とを比較し、その類似性と相違を明らかにすることを目的としている。日本語学では、「思う」の動詞としての性質が1970年代から研究されてきたが、1970年代末から「思う」にモーダルな用法があることが指摘され、論じられるようになった。これに対して、韓国語学では、「생각하다 (sayngkakhata)」の動詞としての性質が主に論じられてきており、モーダルな用法があることを示唆する性質の一部が観察されてはいたが、「생각하다 (sayngkakhata)」にモーダルな用法があることを論じる研究は行われていなかった。一方、日韓対照研究では、「思う」と「생각하다 (sayngkakhata)」の用法に違いがあることが2005年くらいから指摘され始めているが、主に翻訳においてこの2つの動詞が対応しない場合があるという事実の観察に関わる議論が行われているのみで、言語学的な分析は行われていなかった。

これを背景として著者は「思う」と「생각하다 (sayngkakhata)」の先行研究の詳細な調査を行い、過去の研究で指摘された「思う」と「생각하다 (sayngkakhata)」の統語的、意味的、語用論的特徴をまとめている。そのうえで、まず「思う」と「생각하다 (sayngkakhata)」の動詞としての用法を比較し、違いがないことを論じた。続いて、「思う」が動詞の性質に加えて、認識的モダリティの性質を持つことを「認識的モダリティ不可侵性の原理」を用いて示した。その後、同じ原理を用いて「생각하다 (sayngkakhata)」にも認識的モダリティとしての性質があることを明らかにした。さらに、様々な論文で指摘されていた、「思う」が持つ、他の認識的モダリティとは異なる性質は、「思う」がヘッジとして機能していると考えたと自然に説明できることを示した。そして、「생각하다 (sayngkakhata)」も「思う」と同じ性質を持ち、ヘッジとして機能していることを明らかにした。その結果、

日韓対照研究で指摘され始めていた「思う」と「생각하다 (sayngkakhata)」の違いは実は動詞としての用法の違いではなく、ヘッジとしての用法の違いであることが明らかになった。このヘッジとして用いられた「思う」と「생각하다 (sayngkakhata)」の違いの性質を明らかにするために、著者は、発話行為理論を用いて「思う」と「생각하다 (sayngkakhata)」が弱めることができる発語内の力に違いがあることを明らかにした。そのうえで、ヘッジがポライトネス理論におけるネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとして機能していることを用いて、この「思う」と「생각하다 (sayngkakhata)」との間に見られる違いはネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの使用における日本と韓国との文化的な相違であることをブラウンとレヴィンソンが提案した「フェイス侵害度見積もりの公式」に基づいて示した。

本論文の研究成果について、研究成果の意義、方法論的貢献の2つの観点から審査した。その結果、審査委員は、このそれぞれについて次の点で本論文の意義を認めるものである。

まず、第一に、研究成果の意義について述べる。これまで違いが気づかれながら体系的な分析が行われていなかった「思う」と「생각하다 (sayngkakhata)」について、「思う」と同様に「생각하다 (sayngkakhata)」にも認識的モダリティの特質があり、ともにヘッジとして機能していることを明らかにした点及び「思う」と「생각하다 (sayngkakhata)」の相違の性質がポライトネス・ストラテジーの文化的違いにあることを明らかにした点は、これまで明確に論じられたことがなかった論点であり、当該分野への貢献であると判断する。もう少し詳しい議論があれば、さらに分析が精密になったと思われるが、説明が簡潔で分かりやすくなっている点は評価できる。

第二に、方法論的貢献について述べる。本論文は全体としては記述言語学の枠組みで行われた研究であるが、過去の研究において発見されてはいたが、関連づけられていなかった「思う」の様々な性質を、認識的モダリティ、ヘッジ、発語内の力、ポライトネス・ストラテジーなどの理論的な概念を用いることによって関連づけて統一的な分析を行ったこと及び、この分析を韓国語の「생각하다 (sayngkakhata)」に応用するという方法の有効性を示したことは日本語学、韓国語学、日韓対照研究の分野への方法論的貢献であると判断する。

以上の二点において本論文は高い学術的意義を持つものである。したがって著者は、北海道大学博士（国際広報メディア）の学位を授与される資格があるものと認める。